



「空白の輪郭」を埋める : 『古都の占領』によせて

朴, 沙羅

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 50:77*-92*

(Issue Date)

2018-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010504>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010504>



「空白の輪郭」を埋める 『古都の占領』によせて

朴 沙 羅

1. 記憶と忘却

敗戦の記憶と京都とは、あまり結びつきにくいように思われる。京都は神戸や大阪のような大規模な空襲（空爆）を受けていないからかもしれない。せいぜい「原子爆弾の投下予定地の1つになっていたが、結局は免れた」という程度ではないだろうか。敗戦後に連合国軍によって軍事占領された記憶も（国内のどこでもそれほど記憶され続けているわけではないと思うが）希薄かもしれない。

ところで、私は京都市左京区に生まれ、今までほとんど居所を変えずにきた。京都の戦争・戦争というと、幼い頃から高校時代にかけて聞いた断片的なエピソードが思い起こされる。私の実家の隣に、京友禅の職人であるご夫婦が住んでいた。私は小学校が終わり、学童保育所から帰ってくると、晩ご飯の時間になるまで、自分の家ではなくそのお家に帰っていた。そのお家のおばさんから何度か、「植物園のあたりにアメリカ兵がいた」という話を聞いたことがある。そのおばさんには3人の息子さんがいた。そのうちの1人は戦災孤児で、幼い頃にお隣のお家が引き取ったと知ったのは、私が中学校に入ってからだった。

お隣のご夫妻の、女性の方（私は単に「おばちゃん」と呼んでいた）にはご両親がなかった。私はかつて無神経にも「おばちゃんにはなぜお父さんとお母さんがいないのか」と尋ねたことがある。「おばちゃん」は私に、自分が満州で生まれたことと、京都に戻ってくる時に彼女の両親が亡くなったことを話してくれたが、「あんまり悲しかったから全部忘れてしまった」というような言葉で結び、私はそれ以上、何かを聞くことはできなかった。明るくて優しく笑顔絶やさない「おばちゃん」が、彼女の兄と2人だけで京都に引き揚げて

きたあと親戚の家をたらいまわしにされたこと、何が原因だったのかわからないけれども中学生になるまでほとんど話すことができなかったことを、後になって「おばちゃん」の兄から聞いた。

もうひとつ。高校時代の化学の先生に、中国南部から引き揚げてきたという方がいた。酸と塩基に関する授業の時、その先生は自分の戦後の体験に言及した。彼は中国南部から引き揚げてきた後、京都市左京区を流れる高野川沿いにあった、引揚者住宅（現在は京都市障害者スポーツセンター）に住んでいた。そこでは日中に大人が床屋をし、夜になると集まった髪の毛をよく洗い、塩酸と水酸化ナトリウムで中和してよく漉し、子供が瓶詰めして「アミノ酸醤油」を作って売っていたそうだ。当時の私にとって、中和という現象よりも、そのような商売が可能だった空間が、自分の生まれ育った街であることの方がはるかに興味深かったのは、言うまでもない。

このようなエピソードの1つ1つを、私は「戦争」でも「占領」でもなく「平和の始まり」として理解していた。それはなぜだったのだろうか。本書は実は、そのような問題意識から始まる。占領期を忘却し、あるいは占領を「戦争の継続」ではなく「平和のはじまり」として理解してしまうことへの疑念から、である。

忘却のひとつの理由は、戦争が相手に向かって戦果を誇示するのに対し、占領は占領を被占領下にある人々に知らせめないこと、忘れさせることを第一にするからではないか……繰り返されるどの戦争、どの占領にも共通する戦争というもの、占領というものの容赦のない仕組みを知りたい。
(13) ¹

戦後が築いた生活と思想に脆さがあったとすれば、戦後をその根源でもう一度捉え直してこれからを考えなければならないであろう。……私と多くの人々はその後、何を無意識の奥深くに突っ込んで忘れてきたのかを思い出してみたい。(14-15)

2. 本書の内容

本書は8章300ページ以上に及ぶ大著だ。それは第1部「目に見える占領：地図から読む京都占領」と第2部「目に見えにくい占領」とに分けられる。第1部は文字どおり、京都市（なお、本書における「京都」とはどこを指しているのかという問題はここでは措く）の地図の上に占領期の建築物や事件を重ね合わせ、過去の事件を蘇らせるかのように記述する。

2-1 占領期の軍政・行政

第2章「占領期の京都地図を歩く1：南北動線1 長期占領の布石」は、京都の占領がどのように始まったかを述べる。占領軍の到来は1945年9月24日だった。かつて京都伏見深草にあった旧日本陸軍第16師団はレイテ島守備に投入され、ほとんどが戦死・病死しており、やってきた占領軍と顔をあわせることはなかった。現在四条烏丸にあるCOCON Karasuma、かつての大建ビルに、米第6軍第1軍団司令部が置かれた。京都府庁には終戦連絡事務局京都委員会が設置され、占領軍受け入れのための会議を9月7日から始めた。占領行政は1945年の第6軍による軍事占領（非軍事化）から始まり、1946年より第8軍による保障占領（民主化）へと転換していったが、「占領期は果たして戦後のはじまりなのか、それとも休戦という戦時期体制の一部であったのか、という根本的な問題」（53）は解かれないまま、本書の末尾まで続いていくことになる。

占領改革が武力を背景に無理やりに展開されたことは、その強硬な手法で「イケーズ」とあだ名された民間情報教育局課長E. ケーズによる京都の教育改革（義務教育優先、新生中学校開講、PTA発足、教員講習会）を詳述する際に端的に描き出されている。とはいえ、改革の一方的な強制への不満と義務教育の延長や教育を受ける権利の拡大は肯定され、その後も生き残っていった。

この章のタイトルになっている「動線1」とは、大まかに言うと烏丸通に当たる。占領軍の車両・市電・輪タク・牛馬・人が往来するこの通りでは、多くの事故や事件が起こった。しかし、占領軍が引き起こした事件は報道できず、地位協定もないため加害賠償を請求できなかった。

道路は住民と「進駐軍」との最初の接点だ。第3章「占領期の京都地図を歩く2：南北動線2、占領軍と住民それぞれの生活圏」では、軍事や行政から京都の生

活へと視点が変わる。南北動線2とは、北大路以南の東大路通（東山通）を指す。植物園のディペンデント・ハウス群すなわち占領軍扶養家族用住宅は、一般的な京都市民が入ることを禁止された閉じられた空間だった。そこへ行き来する人々がどのような視線でその空間を見つめ、そしてどのように見つめられていたか、当時の高校生が書いた小説から伺うことができる。進駐軍最初の宿营地となった岡崎公園は、開かれた空間として市民が往来していた。接收住宅改修記録や「連合軍接收住宅図面」文書は、占領軍が接收し、京都府庁建築家が改修した様々な住宅を舞台にした（和洋折衷住宅や明治の元勲・財閥関係者の邸宅などが多かった）「占領する側が持ち込むアメリカ式生活文化と、京都住民の生活文化との異文化接触の記録」（89）として読める。床の間まで真っ白なペンキで塗られたり、畳が板ばりされたり、庭の灯籠の苔が磨き落とされたり。想像すると思わず笑いが漏れてしまう。

行政ラインとしての烏丸通と生活圏が接触し交差する東大路通では、占領軍が引き起こした交通事故（ひき逃げ・飲酒運転）や建物破壊、暴行、傷害事件を復元することができる。そこから、京都の地域的な違いも浮き彫りにされる。いわば京都の南北問題とでも言うのだろうか。住民は「左京区、東山区、伏見区から宇治市、大久保の基地、久世群青用の軍需工場、さらには奈良市に近づくにつれ軍用道路の性格を強めることをよく認識していたのであった」（98）。水洗トイレのある家が全て接收されたというエピソードが示す通り、占領軍に接收された住宅は、そもそも裕福な家庭の所有物だった。それはまた、どのような占領軍とどのように接触したかという体験が、京都のどこに住んでいるかで異なることを意味する。

そして本書は京都市のはるか南北へと、視線を広げていく。第4章「京都市地図を歩地図に拡大、動線を伸ばす」は京都府の占領（とその継続）を述べる。京都で空襲を体験したのは、舞鶴港周辺と京都市・京都市南部の山城地域に集中している。連合国軍による空爆被害の爆弾投下地点と、占領軍による事故地点の分布状態が似ていることに著者は気がつく。「ある軍隊の基地になるということは別の軍隊の標的になるということなのだ。敗戦によりその基地が別の軍隊の基地となることが現にある。するとさらにもうひとつ別の軍隊の標的と

なる可能性が生まれる。子供たちに占領期を戦争が終わった平和時であると思込込させることは、空爆をした側にとって必要があつてなされたことだったのだ」（103）。「進駐軍自己見舞金支出負担行為書」を読み直すと、生産者であり、多くは市部ではなく郡部に住んでいた人々の経験した軍事占領の一面が見えてくる。占領軍のジープが引き起こした事故で死亡した家財（牛を含む）の被害に対する見舞金申請書には、牛の曾祖母8頭の名前が書かれた血統書がついていた。占領軍が遊び半分で弾き飛ばしたタバコの吸い殻から出火した火事では、「そのときいづれからか進駐軍の大型水車（タンク）一台が鎮火するまで水を運んで防火に協力していただきましたが、その反面私は人を馬鹿にしていると骨髓に徹しました」（115）という記述が引用される。骨髓に達したのは恨みであつたか、怒りであつたか。

京丹後の占領期以後の歴史に鑑みれば、戦争中・占領期・占領期後という区分は次第に曖昧になってくる。丹後半島はその後「進駐軍」から「駐留軍」（米軍）及び自衛隊の軍事基地であり続けている。2016年には、地域住民の反対を押し切って、丹後半島の経ヶ岬に米軍のレーダー基地が建設された。引き続き基地を押し付けられている住民と、1950年に成立した蜷川府政が郡部に地盤を築かなければならない必要に迫られた結果として、見舞金が申請され支給されたのではなかっただろうか。牛や茅葺の家の被害を訴える個々人の声は、日本と京都の占領期後の政治の中で初めて聞きとられたのだった。「終戦処理費が処理していた多くの事項が占領終了後は思いやり予算になったのではないか」（137）と著者は指摘する。

2-2 占領下の生活の諸相

第2部「目に見えにくい占領：闇の生産・流通・消費の仕組み」は、軍事占領の行政を主題としていた第1部から一転して、占領期の生活空間を活写する。第5章「占領期京都メディア空間」は、市電に乗って京都市内を移動する、図書館で本を読むといった著者の個人的な記憶を、歴史的に判明している事柄と結びつけるところから始まる。占領初期には図書館、出版社、新聞雑誌の中心が関西地方へ移り、京都は図書館の市民への開放や出版の自由について、占領政策のモデルケースだった。その時に生まれた地方新聞、京都日日新聞では、

人気小説家だった織田作之助が「それでも私は行く」を連載した。これは京都の繁華街を登場人物たちが歩き回る、「行き当りぱったり型の彷徨小説」（163）であり、また重要な登場人物は京都日日新聞の女性記者をモデルにしていた。占領期に雨後の筍のごとく生まれた雑誌社・新聞社は反体制的カウンターメディアとして、京都にも小規模な拠点が散在し競合していたが、検閲制度・配給制度によって管理され、治安当局によって監視されていた。

第6章「生きるために何を売り、何を買うか1 物資の闇市・自由市場」は、占領期の飢餓と配給制度という、欠乏の中での分配を主題にしている。飢えた子どもたちは弟妹の命綱であった粉乳をこっそりと舐めた。飢えた高齢者は貸し借りの忘備録のような日記をつけた。何を買い、何を受け取り、何を与えたかは、ただの金銭や食料品・物品のやりとりというだけではなく、文字通り生命をつなぐためのネットワークの記録だった。闇市に買い出しに行くだけでなく、経済統制を破って買出しに出かけることや、担ぎ屋・闇屋として働くこともまた、京都市民が広く共有した記憶の一部を成していた。

第7章「生きるために何を売り、何を買うか2 自分を売る」はララ物資配給記録が乳幼児から中学生まで、30近くの社会事業施設・保護施設に小麦粉、パスタ、乳製品、缶詰、衣服、薬品などを支給したことから、飢餓の広がりが見える。946年に観月橋のたもとに作られ、54年に山端修学院に移転した児童保護施設（指月寮）では、戦災孤児、引揚孤児、生活困窮家庭の児童が100名以上収容され、共同生活を行った。回想録に収められた座談会の記録には、しばしば過去の自分たちをいたわるかのような笑い声が挟まれる。しかし当然ながら、子供たちは大人の世界にも増して激しい差別や暴力の中で生活していた。

住民と進駐軍それぞれの階層棲みわけと恋愛、結婚、売買春、強姦もまた、占領期の生活空間の一部を成していた。いわゆる戦争花嫁、すなわち米兵との国際結婚だけでなく、米軍を対象とする慰安施設もまた描写される。京都府は地方自治体が内々に業者を呼び仕事を請け負わせた点で特殊であった。業者は中国大陆に軍隊向け歓楽施設を開店した業者と同じ。この点でもまた、戦争中と占領期とは地続きだった。公娼制が廃止され私娼が容認されたあと、日本政府や地方自治体は占領軍の性病対策と予防対策として、買春する側ではなく売

春の当事者である女性を消毒の対象としていく。京都で街娼の実態調査を行ったのは、後に同志社大学社会学部の教員となる小倉襄二・住谷悦治や京都大学教員となる作田啓一だけでなく、戦前に京都社会福祉研究所から機関紙名『軍事厚生』を発行し「全体主義的共同体思想」を称揚していた竹中勝男が代表だった。京都社会福祉研究所の機関紙名が『軍事厚生』から『社会』を経て『社会福祉』へと変わったように、竹中もまた全体主義的共同体思想から「社会民主主義的理論」へと自らの依拠する思想を変えたのだろうか。もしかすると街娼だった女性たちは、竹中が時代とともに自分は変化した、という「転向の論理」（273）を証明する事業の1つとして調査され、記録されたのかも知れない。

日本占領を3つの時期に分けるとすれば、第3期は朝鮮戦争で幕を開ける。朝鮮戦争に日本が本格的に参加する以前から、重要な部署の大阪移転、京都軍政部の事実上の消滅、米陸軍病院（第一日赤）に負傷者が朝鮮戦線から送られてきた、などなどによって、京都の人々は変化に気づいていた。第8章「京都の朝鮮戦争」は、「朝鮮戦争反対のビラ撒いて逮捕された学生さんは米軍の軍事裁判にかかってみんな沖縄送りになった」（283）というかつての街の噂が、どうも違っているらしいという話から始まり、実際に「朝鮮戦争反対のビラ撒いて逮捕された学生さん」だった小野信爾が著した「占領期京大生獄中日記」を記述の中心に据えている。小野は1950年11月に共産党に入党、51年2月に党からの指示で警察官は朝鮮戦争に協力するなというビラを下鴨警察署に撒きに行き、その場で逮捕された。そこから52年4月28日に山科の京都刑務所から釈放まで、小野は獄中のラジオでニュースをたどり、日中の懲役労働によって気持ちを立て直した。しかし朝鮮戦争によって発注を受けた物品が、軍服の色である「カーキ色のはんらん」（312）として認識されるや、小野は懲役労働を拒否した。もちろんそのような1人のストライキは何の影響ももたらさなかったのだが。社会主義の理想を実践するために生きた、90歳の青年たちからの伝言を添えて、この章は閉じられている。

第9章「目に見えにくい・目に見えない占領」は、通常あまり占領政策とは結びつけられない文書から、占領期の、そして占領期から生まれた戦後の日本の基調となった政策を述べている。1つ目は法学者・宮崎繁樹による「占領に

関する一考察」という論文だ。宮崎は日本の占領政策を、間接統治と言いながら直接統治の性格が含まれる「立ち入った占領行為」と述べる。著者は「占領期がじつは長い「休戦」期、つまりは戦争の時代の続きであったとすれば、戦後は占領期の続き、遠隔操作がなされる「立ち入った占領」だったのではないか(337)」と指摘する。

その遠隔操作とは具体的に何だったのか。ルース・ベネディクトによる『菊と刀』は、日本文化論というよりも「占領軍の占領政策の手の内が克明に記された本」(341)として、「諜報活動が集めた情報がどのように分析され、その結果がどのように占領政策に反映されたか」(348)を明らかにする資料として読める。「戦争中の日本国民と降伏後の日本国民をつなぐ蝶番間接は天皇制とそのイデオロギーである、占領する側の立場からすれば、これを利用しないわけではない、という認識と占領のイデオロギーとを率直に語っている」(344)。これはまさに京都の、いや日本の占領行政の基本設計図ではないだろうか。間接統治は占領軍が占領のために費やす費用と労力とを大幅に節減させたが、そのカギを握っていたのは天皇制の存続だった。

天皇は戦争中、軍馬にまたがった軍人として自らを提示し、戦後は家庭人として女性的なイメージを持った。三島由紀夫『金閣寺』の一場面、白人の米兵に促されて、青年僧侶が赤いコートの女の腹部を踏みつけて流産させる場面を、著者は「アメリカ」(白人米兵)、「日本」(赤いコートの女)、「インフォーマント」(青年僧侶)の関係を象徴していると読む。女は米兵との抱擁(『敗北を抱きしめて』!)の結果として生まれるべき胎児を踏み殺されながら、激しい目つきで勝者を見上げ、睨む。「女性嫌悪はしばしば女性で表象される敗戦国、敗北という現実を引き受けている当時の日本に対する嫌悪でもある」(362)。『金閣寺』における女への嫌悪感と白人米兵への友好的な感情は、戦後日本の知識人を端的に象徴しているのではないだろうか。しかし、「暴力と差別を兄弟的友好関係で言いくるめる時、女子供は救済の対象でしかない」(363)。

石川フミヤス『青春日記』は、占領期の京都で育っていく中学生たちを描いた漫画である。大規模な空襲もなく、そのまま占領・戦後を迎えた京都の、ある意味の長閑さと、著者は石川の漫画が湛えているその空気を「僕らの世代は

負けるという思想なんやから」(365) という、グループインタビュー中の発言を重ね合わせる。逃げる、殺さない、生き延びる、戦わない——そのメッセージで本書は締めくくられている。

3. 本書の方法とその特色

3-1 資料の多様性

本書についておそらく誰もがまず言及するのは、過去を再構成する、その独特の手法だろう。個々人の記憶から歴史を再構成しようとするのは、断片的かつ個人的な「虫の目」から、一貫した筋を持った集合的な現象を見出す「鳥の目」とを接続させることでもある。本書はさりげなく、しかし考え抜かれた幾つかの手法によって、その接続に成功している。「無数の個人の語りに耳を傾けるとき、果たして歴史書よりも多様な物語が浮かぶのだろうか」(14) と疑問を抱きつつ、「私が生活史の立場からの占領期研究を始めたのは、所属や集団から政治を考えるのではなく、あの瞬間を生き延びた無数の小さな物語から、政治や経済などの大きな物語を捉えなおすことはできないかと思うからである」(24-25) と、調査と叙述の方法を選択した理由を述べている。

膨大かつ多様な資料の重ね合わせによる記述は、本書第一の特徴と言っていだろう。例えば第2章では、3名からのインタビュー、新聞記事、2種類の日記、著者の記憶・一般書籍（『長崎の鐘』）・文献資料（占領軍の月報・半月報）・年表といった資料が代わる代わる引用されるのに加えて、COCON Karasuma、京都御苑、烏丸通といった京都市内の重要な建造物や道路が占領期にどのように利用されていたかが述べられる。第3章は著者の記憶にはじまり、文芸部の雑誌に掲載された、当時の高校生による小説「裏口」、歴史地図（City Map of Kyoto）・漫画「ブロンディ」・「Kyoto 7 pieces 鬼畜米国占領軍用京みやげ写真」・記憶・雑誌（『婦人公論』）・接収住宅改修記録・記憶・進駐軍事故見舞金支出負担行為書が引用される。第4章は進駐軍事故見舞金支出負担行為書によって個々人の訴えを通じた軍事占領という経験を詳述し、続いてインタビュー記録、日記、地図、調達庁調達による配給の記録と続き、最後は現在の京都府北部に配備されたXバンドレーダーに関する記述で終わる。

本書は著者の個人的な記憶やインタビュー記録、日記や回想録といった私文書や当時書かれた、あるいは占領経験に裏づけられた小説や、専門書・一般書による先行研究、絵葉書や写真・地図・新聞・雑誌などの資料、占領軍や京都府・京都市による公文書といった膨大な資料を組み合わせている。しかも、それらの全てが使われているわけではない。筆者の勝手な推測ではあるが、著者は集めた資料や調べた事柄の3割も使っていないのではないだろうか。

3-2 「虫の目」と「鳥の目」

本書は、インタビュー・文献調査・地図の作成・備考欄に私的記録を書き込んだ年表の作成という4つの方法によって、占領期の京都の日常生活を再構成しようと試みる。この方法のゆえに、読者はまるで占領期を追体験しているかのような錯覚に陥る。

例えば著者は、1945年から52年までの「7年間の厚みを1年ずつの薄片に剥がしてみた」(94)り、ある小説の登場人物や人間関係を整理するにあたって、「もう一度、当時の読者が読んだように『京都日日新聞』紙面で読み直した」(207)りもする。それによって、読者は勞せずして自分たちが同じように新聞紙上でその小説を読んでいるかのような気にさせられる。

この本がもたらす、大量の情報に圧倒される体験は、もしかしたら、占領期(に限らず、日常)を生きている時に体験することとよく似ているのかもしれない。記憶・記述の重ね合わせそれ自体が、再構成しようとしている過去の複雑さを表現している、と言い換えてもいい。私たちは毎日、自身の許容量をはるかに超える情報に圧倒されながら暮らしている。その情報とは、メキシコで左派政権が誕生したこと、今年の梅雨明けが例年より早かったこと、第3次安倍内閣の退陣を求めて国会前で4万人がデモを行ったこと、自分の家の水道管がどうも修理を必要としているらしいこと、今年の科学研究費に採択されなかったこと、といった文字どおり雑多なものだ。私たちには、それら全てを受容することはできない。だから、私たちは日々の雑多な情報を取捨選択して受け取るし、誰かに何かを話すときには一貫した筋を持つように取捨選択して話す。

本書は、そのような取捨選択を通じた、状況をなるべく大きく俯瞰するような視点を「鳥の目」と呼んでいる。これは比喩というよりも本書の方法につい

ての端的な説明に近い。虫の目によって見えるものは、路上の人々の生活である。その目には、配給や闇市、占領軍のジープによって破壊された家や占領軍によって殺害された家族への補償を求める人々の姿、占領軍を相手とする街娼や彼女たちを管理しようとする行政とそれに協力する研究者たちが映し出される。鳥の目によって見えるものは、占領期の京都の街の全体と、そこに象徴的に示される「占領」という軍事行動の歴史である。本書のカラー図版で示される京都市内の地図は、鳥の目に映った光景そのものだろう。本書に引用されているインタビューや日記、回想録、小説、補償申請書といった個々の私人による記録は、それを作った人々の姿と、その人々が生きていた占領期の社会を描き出している。これは著者が『街娼』調査の対象者とされた女性たちの回答について「彼女たちの回答を今読むと、順不同の羅列であるにもかかわらず、彼女たち自身の姿以上に、彼女たちが対峙していた占領期の社会が描き出されている」（261）と述べるとおりだ。

4. 戦後的価値とこぼれ落ちたもの

本書の構成の妙は、その主題であるところの平和（戦争）と民主主義、民主主義を支える概念であるところの人権、そしてそのような戦後的価値から零れ落ちたものとは何なのか、という著者の問題意識が、細々とした記述の中に見事に織り込まれている点にある。

4-1 デモクラシーの理想

「戦争そのもの、占領そのもの」を問おうとする本書は、その端々で「デモクラシーの理念」である自由・平等・博愛とは占領においていかなるものであったのかと問う。占領期を通じて日本は民主化された、と言われる。当然ながら、その民主化とは「軍による民主改革」（63）であり、軍事的な暴力を通じて無理やりに民主主義を植え付けることだった。著者はそのように植え付けられていった民主主義的な諸制度について、「新しい制度は結局、住民たちが選別してゆく」（63）「民主主義の内容は当事者がひとつひとつを絶えず検討してゆくべきなのだ」（64）と指摘する。「民主的であれ！」と暴力を通じて教え込むことは、果たして矛盾ではないのだろうか。

戦後日本における民主主義を問題にする以上、天皇制の存続に触れないわけにはいかない。著者は当時、京都大学の学生だった小野信爾が逮捕され、刑務所に収監されていた時の日記を検討する。そして小野氏が釈放されたのは恩赦によるものだったことを指摘し、「占領目的阻害行為処罰例違反を御名御璽つきの勅令で逮捕し、恩赦で釈放という理屈がなぜ通用したのか」(321)と問う。占領期において、否、戦後日本において、天皇とは何の象徴だったのだろうか。天皇という制度によって可能にされていたもの(現在でも可能になっているもの)は一体何なのだろうか。

本書はまた、平等にも言及する。食料配給制度と闇市において、平等はその通奏低音をなしている。「絶対量が不足するとき特に、平等は難しく解き難い問題である」(186)。乳幼児や高齢者といった、より弱い人々の食料を奪ったことのない子供や大人が、果たしてどのくらいいたのだろうか。平等という問題は、占領期の政治運動にも深く関わってくる。著者は、先述した小野信爾とともに収監された2名もまた、社会主義運動に関わって逮捕・収監されたと述べ「彼らを社会主義の理想に駆り立てたものは何だったのか」と問う。「私はそれは、自由・平等・友愛のデモクラシーの理想の中で最も実現の難しい「平等」という解き難い問題を考えた挙句だったのではないかと思う」(322)と結ぶ。

友愛(fraternity)という価値の内実もまた、本書の中で問われている。「[自分のため]」「みんなのため」をいかにして同時に成り立たせるか、という「友愛」の問題」(185)だけではない。占領軍兵士と日本人セックスワーカーとの関係は、占領軍資料において文字どおりfraternityと記述される。そして、京都市内における占領軍慰安所の設置から公娼制度の廃止・私娼の容認という過程において、「もしどの国の軍隊も慰安所と売買春市場を必要とするという前提が国内行政と占領行政の間で共有されていたのだとすれば、敗戦国の民主化を歌うポツダム宣言の論理は破綻するはずである」(245)と著者は指摘する。

4-2 普遍的人権

著者は「目に見えやすい占領」「目に見えにくい占領こそが占領政策の主眼であり、私は見えないままに占領があった時代を生きたのかもしれない。目に見えにくい占領を見る方法を知りたいものである」(137)という。もしかす

ると、本書の中で最も重要なのは、本書で取り上げられたデータが言及しなかった空白（「資料の空白、空白の輪郭らしきもの」（323））かもしれない。では、本書において何が空白のまま残されているだろうか。実は、何が「資料の空白」であるかについては、本書で明確に述べられている。すなわち「住民から隠さなければならない諜報活動」（349）と、それによって決定されていた具体的な占領政策である。

著者がその存在を感知し得た「空白」の1つは、在日コリアンだった。著者は見舞金申請書類を読みながら、「占領期に「日本国の国籍を有しない者」の中に、長年の間京都に住む旧植民地出身者、つまり在日コリアン等の人々が含まれているのだろうか。……書類には在日と呼ばれる人々からの申請が含まれていないのではないか」（108）と疑問を抱く。闇市をめぐる新聞の記事から「旧植民地、旧帝国の臣民であった「元日本人」を戦勝国でも敗戦国でもないとして「第三国人」と順位付けする構図」（209）を見てとる。しかし、そこには在日コリアンの個人は登場しない。あらゆる資料で、彼らは「集団として名指されるが、個人として記憶・記録されない」からだ。闇市の利権が絡んでいたであろう階級、階層の問題も、「日本人ヤクザ」と「朝鮮人」との民族間対立に書き換えられる。本書の最終章で、著者は宮崎繁樹のインタビューから「特に出入国管理に関連して、「外国人は煮て食おうと焼いて食おうと自由です」なんていう本が堂々と出ていたのです」（335）という発言を引用する。本書の主題のひとつが、戦後の国家の成立と、そこからこぼれ落ちた普遍的な人権であることを、この引用は示しているのではないだろうか。

4-3 空白の輪郭

在日コリアンは本書の中で、おそらくは本書の空白として、言及されている。しかし本書で言及すらされない人々もまた、占領期の京都にいた。例えば引揚者、被差別部落出身者、沖縄出身者、台湾人といった人々だ。彼らにとっての占領期が描かれないこと、あるいは彼らへの言及がないことは、本書の抱える空白というよりも戦後社会の成立そのものが抱える空白ではないだろうか。

本書の問題意識は、「戦争とその続きである占領とは何か、ひいては戦後とは何か」（323-234）という一文に端的に表れている。在日コリアンにとっての

占領期の記憶は、実は本書の中に描かれる、「虫の目」による記述に似通ったものも多い。例えば闇市に通ったり、闇市の物資の運び屋として働いたりしたという、本書197ページの記述に酷似した体験談を筆者は聞いたことがある。日常的な飢えと貧困、朝鮮戦争・民族運動（とそれへの弾圧）といった主題もまた、在日コリアンの占領期の回想には珍しくない。

では、在日コリアンの（あるいは台湾人の、被差別部落の、沖縄出身者の、引揚者の）占領期の記憶を、この本の中に、他の記憶・記録と全く同じように混ぜこむことは可能だろうか。もしそれが難しいとすれば（あるいは「在日コリアンの占領期」「被差別部落の占領期」……というように、別に章を立てて書く方が適切であるように感じられるのであれば）それこそが「戦後とは何か」への答えの1つではないだろうか。戦争がまだ継続していたはずの1945年から52年までの間に、すでに見えなくなっていた人々の姿は、見えなくなったまま、そして見えないことに誰も気がつかないまま、70年以上にわたる時間が過ぎていった。自らと異なる立場にいる人々が見えないこと、見えないことにも気がつかないこと、見えなくとも問題がないことは、どれも全て、この社会が実は深い分断によって成り立っていることを示している。その人々が「いない」ことになっていることこそが日本の「戦後」であり、いたはずのその人たちがいなかったことにされていったプロセスを示しているのが、本書のいう「空白」ではないだろうか。多くの先行研究が示す通り、例えば在日朝鮮人が明示的に外国人としての法的地位を割り当てられていったのは、まさに占領期においてだった。戦後の世界秩序が成立するに従って、日本人は日本へ、朝鮮人は朝鮮へ、沖縄人は沖縄へ、台湾人は台湾へと、それぞれの帰属が定められていった。そして、どこにも帰属しようのない人々は空白を生きるしかなくなった。

蛇足ではあるが、空白はマジョリティから見る時のみ「空白」として認識されることも付け加えておきたい。その空白を生きてきた人々にとっては、単に自分たちの日常が（しばしば歴史として認識されたり叙述されたりすることなく）堆積していくに過ぎない。空白を生きている人々にとっては、歴史というのは自分とは縁遠い別世界の出来事であるか、あるいは自分たちの生きているその世界に起こった出来事の集積であるか、どちらかではないだろうか。そ

の世界を空白として認識されると、むしろ驚かれてしまうかもしれない。

なお、本書の最も恐ろしいところは、このような空白を読まなくとも、本書を満足して閉じることができてしまうところだ。何かが見落とされているかもしれない--そのように指摘すること自体が、すでに稀有なことになっている。深い断絶の中に生きているにもかかわらず、それに気づくことすら容易ではない。読者は占領期の京都の街を歩いていた無数の大人、子供、高齢者、女性たちの姿に圧倒され、明示されているその人びとの姿の記述だけで十分に満足してしまう。そして、著者が「空白」の存在を繰り返し指摘しているにもかかわらず、それに気づかずに、あるいは気づいても気にとめることなしに、深い満足感と感動とともに本書を読み終えることができる。そして読者は言うだろう、本書は「面白かった」「素晴らしかった」「膨大な記述だが一気に読むことができる」「こんな視点から占領期を書いた本はなかった」などなどと。空白はなぜ生じたのか、その空白には何がある（はず）なのか、そんなことは特段に論じなくとも、本書の魅力は（おそらく読者の9割以上にとっては）減じない。まるで占領期の--あるいは現在まで続く、戦後の日本社会の--縮図のようなものではないか。虫の目で見ると日々の物語に圧倒され、時に鳥の目で自分たちに何が起きているのかを理解しようと試みる。どちらの目によっても見えないところがある。しかし、ほとんどの人々にとっては見えないところがあること自体、大した問題ではない。大多数の人々にとって、自分自身が「空白」の中で生きているのであれば、そもそも空白があろうとなかろうと何の問題もない。本書はその方法においても主題においても、そして本書を読むという経験そのものにおいても、占領期とそれに続く戦後日本を追体験させている。だから、本書は恐ろしい本なのだ。

注

- 1) 以下、断りのない場合、本論文注の（ ）の数字は、西川裕子著『古都の占領』（2017年，平凡社）のページである。

要旨

Silhouette of blank: a book-review of Occupied Ancient Capital

Sara Park

This book *Occupied Ancient Capital* (『古都の占領』 by Yuko Nishikawa, 2017, Tokyo:Heibonsha) tells the history of Kyoto when it was occupied by the Allied Powers from September 1945 to April 1952. Great amount of carefully-chosen references from interviews, written (both official and private) documents, maps, novels and newspapers will lead you to rambling in the town of Kyoto, the well-known ancient capital of Japan that survived from the air major raids during the Pacific War. Combination of detailed description of everyday lives of ordinary people in Kyoto and larger pictures of occupation policies in Japan relives past, when people believed the advent of peace but the war still continued. The hidden theme of the book is Japan's post-war regime, namely, democracy and its components; liberty, equality, fraternity. The most startling point of this book lies, however, not in what is written but in not written. The lack of reference in historical sources signifies missing pieces in post-war Japan, namely, various minorities such as Koreans in Japan. This book gives us experience with life in occupied Kyoto, including forgetting continuing war and minorities in the same society, and lets us indulging in peace in the international post-war regime.

Keywords: military occupation, post-war regime, democracy, human rights,
peace

キーワード：軍事占領, 戦後体制, 民主主義, 人権, 平和